

「生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学」を**本気で**考える

加藤 鈺三

信州大学高等教育研究センター・高等教育コンソーシアム信州教育部会長

・中央教育審議会答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』（平成24年8月28日）

答申には「どうやって実現する？」で有効な手立てがない

←「どうやって？」を考えるためには、「生涯学び続け、主体的に考える力」を持っている人がどういう人であるのかの分析が不可欠。答申にはそれがないから。

加藤の分析：生涯学び続け、主体的に考える力のある人であるための条件

- (1) 勉強のしかたを知っている
- (2) 今の自分の状態をモニターでき、次に何をすればいいのかを自分で判断できる
- (3) 勉強した結果、成績が上がったという体験から来る自己効力感を持っている

・大学という文脈では；

(1) 勉強のしかたを知っている

・大学生は「勉強しない」のではなく、「勉強のしかたを知らない」

高校での「勉強」と受験「勉強」は、勉強と言うより問題集をこなすこと

・大学の先生は「勉強のしかたが分からない」という状況が全く想像できない

⇒ 対処： 予習・復習を指示する、予習・復習前提の小テストで成績をつける

(2) 今の自分の状態をモニターでき、次に何をすればいいのかを自分で判断できる

・スポーツの練習ならばこれは当たり前だが、普通の授業では意識されない

⇒ 対処： 小テストは成績を付けるためだけでなく、現状のモニターのためという意識
「これからやる〇〇は、△△ができるようになるため」を常に言う
「ふりかえり」（＝内省）を課す

(3) 勉強した結果、成績が上がったという体験から来る自己効力感を持っている

・「成績は天から降ってくる」という意識

⇒ 対処： 目標への到達度で成績をつける + 学生がモニターできる
＝ 単位は 自分の努力で稼いだ結果 → 自己効力感

まとめ： 目的のための合理的な努力で結果が出る、という実感を積み重ねさせる

・企業は 「大学で学んだこと」を重視していない + 成長しない人間は要らない

⇒ スキルとしての「学び方」が本当に必要なのは就職してから

← 大学では「学び方・成長のしかた」を教えるべき

・コンソーシアムのコンセプト： 「長野県の大学短大を卒業した人は、現場で勝手に成長していく術（すべ）を知っている」
上からの改革は浸透しないが、

何人かの授業で明確な結果を出せば浸透する。 FDに呼んでください。

【資料】

『大学生基礎力ゼミ』7月14日の「ふりかえり」その1

この一週間で、わたしは 予習は授業理解にとっても役立つということがわかった。なぜなら、初めて自主的に予習してみた結果、授業がとても理解しやすかった からだ。力学の期末テスト勉強の負担を減らしたいため、できるだけ授業内だけで完璧に理解しようと思い、事前に教科書で予習を試してみた。すると、今まで復習しないとわからなかった授業がすぐに理解できたため、早い段階から予習を始めておけばよかったと思った。

『大学生基礎力ゼミ』7月14日の「ふりかえり」その2

この一週間の大学生活で実感したのは、復習が大切だということである。そう感じたのは、授業だけでは記憶が定着せず、反復して復習することによって記憶が定着する からである。期末試験が近づき、今までよりいっそう電気物理や微分積分学などの勉強をするようになった。大学になり複雑になった公式も繰り返し反復することで覚えることができた。試験前だけでなく、普段から復習をして勉強量を増やしていきたい。

『Freshman Academic English』5月12日の「ふりかえり」

前回の小テストの解説を聞いているときに 先生が間違ってる箇所の答えをただ書き写すだけではなくて自分で自分の書いた解答のどこが違うのかを考えて聞くように と言ったのを聞いて、今まで私は間違っているところを聞いてそれを覚えるだけだったので勉強の仕方を少しずつ変えていきたい と思いました。

「1つの事例をつくる ことが、その小石が波紋を呼んで、刺激を受ける会社が1社でも10社でもあれば、それが1つの社会貢献だと僕は思っている。」

日経電子版（2015年8月14日） 「差別反対と言うより希望の光になる」 孫氏の矜持 孫正義の焦燥
(3) より